International MRA Association of Japan

IMAJ

NEWS NO.100

（社）国際MRA日本協会機関誌
発行年月日　2002年10月10日
発行所　（社）国際MRA日本協会
150-0022 東京都渋谷区恵比寿南3-7-5
東光苑マンション802号
TEL：03-5721-6861 FAX：03-5724-6880
E--mail：LEB03055@nifty.ne.jp
発行人　橋本　徹
編集人　長野　清志
頒　価　1部200円

第56回コーIC/MRA世界大会レポート

『人間の安全保障のために 世界に対して責任をとる』

今夏のコーIC/MRA世界大会は、7月5日から8月18日までので約1ヶ月半にわたって次の7つの会議が開催され、約70ヶ国から延べ2000名が参加しました。

7月 5日（金）～10日（水）	奉仕、責任、リーダーシップ—健全な世界をつくるために
7月12日（金）～18日（木）	和解と公正さのためにコミュニティ同士を結びつける—誰をも排除しない社会を目指して
7月20日（土）～24日（水）	コー産業人会議 グローバライゼーション—対立ではなく好機となすために
7月27日（土）～8月3日（土）	芸術会議『再生への道』
8月 4日（日）～10日（土）	和解への課題1—平和作りのイニシアティブ
8月11日（日）～12日（月）	世俗的な社会での精神的要素
8月13日（火）～18日（日）	和解への課題2—変わり行く世界における人間の安全保障

また、上記の会議の他に、最後の会議である『和解への課題2—変わり行く世界における人間の安全保障』の一環として第6回コー政治円卓会議も開催されました。今夏の会議には、日本からは、羽田孜衆議院議員、谷川和穂衆議院議員、井上和雄衆議院議員、相馬雪香国際MRA日本協会名誉会長、橋本徹国際MRA日本協会会長、恵子・ホームズ、アガペ代表、石田利美恵元清泉インターナショナルスクール教師を含む総勢18名が後半の3つの会議を中心に参加しました。又、本年も世界各国からの21名の大学院生等を対象に開催された、紛争解決の理論と技術を学ぶ『コー・スカラーズ・プログラム』には、池間淑恵さんが参加しました。

●コー・マウンテンハウスを背景に並ぶ『コー・スカラーズ・プログラム』の参加者たち

今回の会議に参加された4名の方々の感想をお届けします。

■主な内容■

◆第64回コー世界大会レポート・1-6
◆第17回コー円卓会議レポート・6-8
◆第25回小田原国際会議レポート・9-17
◆東京ダイアローグレポート・18-19
◆日韓対話プロジェクト・20
◆事務局便り・20

コー世界大会に参加して

石田　利美恵

私にとって１９９６年、９７年以来、5年ぶり3度目のコー（CAUX）のマウンテンハウスは、周りの自然の美しさも世界各国の人々のあたたかい微笑も少しも変わりなく、久しぶりで心のふるさとへ帰ってきたようだった。今回は以前よりずっと長く滞在していたので、より広く、より深くマウンテンハウスでの生活を味合うことができた。

今年で１００年祭ということもあり、コーには７０カ国からあらゆる国籍、年齢、宗教の違いを超えた、老若男女が約2,000人集い、大盛況だった。今年の総合テーマは「人間の安全保障のために世界的な責任をとる」で7月初めから開かれていたが、私はその後半8月4日から１８日までの「和解への課題1—平和作りへのイニシアティブ」、「世俗的社会における精神的要素」、「和解への課題2—変わりゆく人間の安全保障」という３つのセッションに参加した。

「安全保障」とは、アフリカ、アジア、東欧の紛争地域にとっては、今も行われつつある暴力、貧困の中で、どのようにして自分及び家族を守るかという切実な問題であり、アメリカ、欧州、日本等の先進国にとっては、物質的に恵まれていても、明確な人生目的を持てない若者達、又、精神的豊かさに欠けること等、次元の相違に基づく問題が根底にあり、そこには南北問題が反映されている。

第二のセッションの「世俗的社会における精神的要素」では、あくなき物質主義と環境破壊の中での宗教のもつ大切な役割について、異なる宗教間の対話があった。今回は主にキリスト教とイスラム教との話し合いに重きが置かれた。昨年9月１１日のニューヨークでのテロ事件の後、イスラム教への恐れと誤解がある一方で、各国のイスラムを信じる人々との話し合いを聞き、共に語り合えたこと、また個人的に友達にもなれたことはコーならではのことであった。

午前中に行われる全体会議では、各テーマに沿って関わってきた人たちがその問題点や和解への道について熱く語った。特に発展途上国（アフリカ、アジア等）の国々から参加された婦人代表の積極的な参加とリーダーシップが目立った。午後からは、各地域での分科会があった。今回特に注目すべきことは、日韓の相互理解、特に日韓の若者たちが共に過去の歴史を学び、未来に向かってお互いに協力していこうと話し合えたことだった。また、小人数に分かれての個人的な話し合いもあり、一人ひとりが心を開いて更にお互いの交流を深めることができた。例えば、各々の立場で安全保障問題について話し合っていた時、あるジンバブエからの父親は、国の悪政の下、どのようにして６人の子ども達を養い、学校へ行かせるかを切実に訴えていた。このグループで唯一先進国から参加した日本人としては、日本での自殺、いじめ、登校拒否等の問題は異なった次元のように思え、このことをどのように彼らに語って良いのか困惑した。

宗教の話し合いも小グループに分かれて、各宗教等のメンバーと「神」とは自分の人生にとって何であるかについて各々の体験を分かち合った。日本からは私一人だったので、仏教とカトリックとの話し合いについて触れた折、私が幼児洗礼を受けたカトリック信者であると聞いて一同驚いていたようであった。宗教会議中の日曜日には、レマン湖とアルプスを見渡す国際会議場にて、異なる７つの宗教の人々が一堂に会し、共に瞑想し、祈る会が行われた。世界すべての宗教の人々がひとつになったような心安らぐ一時だった。

このように真剣な話し合いが毎日続くが、その間には絶妙なタイミングで息抜きの時間が用意されているのには感心した。午前中の全体会議において、会議が深刻化した後には１０分くらい若者によるピアノや歌、ダンス等が行われるし、午後はアフタヌーン・ティーがあり、レマン湖を見渡すテラスで三々五々くつろげた。夜には、コーの格式のある小劇場で音楽会や各国のタレントショー（今回はジャマイカやタイの民族舞踊）、ビデオ鑑賞等、バラエティに富んだプログラムが用意されており、多いに楽しめた。また、若い人々は、昼食後、テニス、バレーボール、サッカー等をして各国の人々と交流していた。

●キッチンで活躍する石田さん（右端）

朝夕に私は山から降りてくる牛の澄んだ鈴の音を聞きつつ、色とりどりの野の花が咲き乱れる山道を散策したり、近くにある石造りで素朴なカトリック教会を訪ねるのが、楽しみだった。毎日多彩な人々との交流の間に、各々一人静かな時間を持てることの大切さを身にしみて味わうことができた。

今まで、私は東京のインターナショナルスクールで21年間も教えていたので、世界各国の人々に会うのは慣れていたが、このような短期間に朝から晩までこの様に多国籍の人々に会い、交流したのは初めてだった。特に、日本ではなかなかお目にかかれない紛争地域の人々やまだ地図にも載っていない地域の人々と話し合い、彼らの生の声を聞き、いかに自分が彼らの実情に無知であり、又、無関心であったか反省させられた。

クロアチア、コソボ、アフガニスタン、ナガランド、アフリカのジンバブエ、ソマリア、東欧のルーマニア、リトアニア、アジアのカンボジア、タイ等…からの学生やNGOの若い人々、又は私と同世代の中高年の人々(特に女性のリーダーたち)がどのようにしてこれから自分達の国を建て直していくか、熱心に取り組んでいる姿に感動を受け、その熱意を日本の人々、特に若い人達に伝えたいと思った。アフガニスタンで現在難民の人々の中で実際に働いている若いアフガニスタンの女性のスピーチ「私に勇気を与えてくれているのは、私の中から出る勇気では無く、あの苦しんでいる難民の母親や子供達から与えられる勇気です」というメッセージが強く印象に残った。

今回台所でお料理やお花の世話等、裏方でのお仕事に参加したことは、大変貴重な体験になった。マウンテンハウスでは全員VIPに至るまで、料理かダイニングでのサービス、各部屋のクリーニング、ベッドメーキング等の共同作業に参加することになっている。別に義務というよりも何となく自然に大ファミリーの一員として、手伝いたい気持ちになってくる雰囲気がある。男性が台所で働いたりする習慣のない国の奥さん達はご主人達がエプロン姿で台所の中で洗い物をしたり、野菜を刻んだり、大食堂でコーヒーやお茶のサービスをしているのを見て喜んでいた。敵対国同士の人々でも、この台所で共に働いている内に、お互いに心が和んでくるようであった。

私は最初の一週間はキッチンでお料理の手伝い、二週間目はお花の世話をするグループに参加した。私達のクッキングチームは中国、オーストリア、フランス、ノルウェー、トルコ、イギリスとバラエティーに富んでいたが、言葉の壁を越えて毎日一緒に働いている内にチームワークもとれて来て、和気あいあいと話しつつ仕事をして楽しかった。疲れたと思う頃にはコーヒーブレイクがあり、それぞれの国の話に花が咲いた。

六年前、最初にこのマウンテンハウスに来て印象に残ったのは広いお城のようなこの建物のすみずみまで活けられている美しい花々だった。入り口の大ホールや会議場に活けられている見事なアレンジメントだけではなく、各フロアーや各部屋、食堂の各テーブルの上にまで可愛い花が活けてあり、その心使いにうたれた。今回念願かなって参加したお花を活けるチームは、イギリスから三人、アメリカから一人、パキスタンから二人と私の七名の女性。毎朝、会議の始まる前にミーティングがあり、その日の仕事の分担が決まる。私の仕事は主に5階のフロアーの花々と植木、一階のティールームと小会議室のお花のお世話だった。ミーティングの終わりに皆で世界平和のために朝の祈りを捧げた。

このようにしてマウンテンハウスでの世界各国の人々との共生は、表立ったVIPの国際会議だけでなく、これら裏方の人々の献身的なボランティア精神で成り立っているということを学ぶことができた。何年ぶりかでここに戻ってきたというカナダ人のドクターがこのマウンテンハウスは、何時来ても彼にとっては“スピリチュアル・ホーム(SPIRITUAL HOME)”だといっていた。又、あるカンボジアの人は「ここは、“スピリチュアル・スクール(SPIRITUAL SCHOOL)”だ」とも言っていた。私にとっても、マウンテンハウスは、世界中からの老若男女が国籍、宗教、年齢の違いを超え、共に祈り、共に語り合い、共に働き、スポーツや音楽、ダンスを楽しみ、共生出来る、皆の“スピリチュアル・ホーム”のように思えた。

さて、この理想的なマウンテンハウスの“スピリチュアル・ホーム”から各々の国へ戻り、現実に面したら何が出来るのかが私達への課題なのだと別れ際に各国の人々と話し合った。

私は教職という立場から一人でも多くの日本人が、特に若者がこのような所に来て、世界の人々の生の声を聞き、話し合えるよう、彼らに必要なコミュニケーション能力を育成していくことが、これからの私の使命であると思う。真のコミュニケーション能力とは、単に語学ができることではなく、自分の国の歴史や文化をよく知り、アイデンティティーを持った上で、他国の人々の話しを真摯に聞くこと、そして共に助け合っていけることだと思う。その意味でもこのマウンテンハウスは、若い人々だけでなく、私達にとっても本当の“スピリチュアル・スクール”としての役割を見事に果たしている。 (以上)

感銘深かったコー世界大会への参加

石田　進 (ネパール教育協力会代表)

今年で満百年の歴史を持つ、ディズニーランドのお城のモデルにもなったというコーのホテル会場の広々とした優雅なルームの二重扉を開くと、千メートルも差のある足元のモントルーのダイヤモンドの夜景が輝いていました。鏡の様なレマン湖面を月光が渡り、一陣の冷風が吹き抜けました。正面にはフランスアルプス、左奥にはイタリアアルプスの白銀の嶺が浮かんでいます。

「人間の安全保障」会議は8月13日夜、オランダの元大使 Edy Korthals-Altes 氏の講演から始まりました。「私は本国の訓令と自分の良心との葛藤により大使を辞任しました」と仰言られ、私は雷に打たれたような気がしました。住友ご夫妻のお導きを得て入会して19年、語学力が弱いのでコー行をためらっていましたが、昨年大阪で相馬雪香様とコー行を約束し、今夏の実現となりました。オープニングからこの衝撃的なスピーチ。これは素晴らしい大会になるぞ、と期待に胸をふくらませ、いつまでもレマン湖の月光をながめていました。会期中多くの講演に感銘しました。ジャマイカ総督 H E Sir Howard Cooke 氏は、「我々が持っている十分なエネルギーを兵器製造や破壊のために使っている。幸福のために使うべきだ。我々の過ちを正し、何が正しいか、それを実行しなければならない。敵のために祈ることが出来なければ信仰はない。」と強調されました。この日のデイスカッション時に私は、「冷戦終結後、戦争がなくなると思いましたが、国際武力紛争は増え続け、その犠牲者の90%は兵士ではなく市民です。2年前に『兵器輸出禁止キャンペーン』NGOを立ちあげました。どうぞご協力をお願いします」とアピールして拍手を頂きました。その後、欧州議会の外交・人権防衛委員長を務めるドイツの Elmar Brok 氏に励まされ、兵器輸出禁止関係資料を要請されました。また、オタワ条約・国際刑事裁判所設立・地雷禁止を国連に提訴し決議させた中心人物であるカナダ前外務大臣 Lloyd Axworthy 教授からは、「非常に重要なことです。貴方の出来る範囲でぜひ活動を続けてください。」と賛同を得ました。翌朝、散歩をしている途中、偶然再会し、教授自ら一緒に写真をと私のカメラで知人に撮影させて下さいました。このカナダの大臣に逢うことは以前からの夢でしたが、コーで突然こんなに容易に会え、言葉を交わせ、賛同まで得られるとは、MRA の広さ、大きさ、深さを知り、人生に希望の湧いてくる思いがしました。　(以上)

●食事も大切な相互理解の場（左端が石田氏）

◇◇　こころで感じたコー世界大会　◇◇

三田　紗英子

この夏私は、初めてコーに参加しました。コー・マウンテンハウスに一歩足を踏み入れた途端に、そこはもはやスイスではない気がしました。違う肌の色、様々な言葉、様々な表情…自国の悲惨さを怒りで訴える人、友達の国で起こる問題を初めて知る人、自分の使命を見つけようともがいている人など、このような様々な状況にある人々が共同生活を通して最後には自分なりの答えを見つけることが出来る、コーはそういう場でした。

私は今年大学を卒業し、周りの友達と同じような就職という選択をせずに、以前から興味のあったコミュニケーションの掛け橋となる通訳の養成所に通っています。コーでの公用語は主に英語とフランス語なので、私にとっては実践のチャンスだったのです。さら

に「会議でブースに入ってやってみなさい」と相馬さんや通訳の方からも言われていました。挑戦してみたい！そう思う一方で自分の能力不足、きっと大失敗するに決まっている、迷惑をかけてはいけないと思い、実際の会議ではブースに入ってプロ通訳者の方の隣に座って見ているだけでした。そうこうしているうちに３日たち、相馬さんに言われました「人にどう思われるかではない、自信のある人なんていないのだからやってみなさい！」この一言で私はやってみようと決心しました。実際にやってみると、今まで気が付かなかったもの、次の目標が見えてきたのです。今日はこの部分が出来なかったから明日は出来るように、この場合通訳者の方はどう対処しているのだろうか、明日はもっと長くやってみたい！、こんな具合です。

同じような事が、日韓のワークショップでも起こりました。私は今年の６月に行われた小田原会議に参加し、さらに日韓問題についての若者グループの一人として参加していたので、このワークショップでは日本の若者の代表としてコメントをして欲しいと言われていました。私は又ここでも嫌だな、と思いました。日本・韓国を代表する素晴らしい功績をお持ちの方々の後に、私がそれ以上言える事はないのに…こういう風に、又、人にどう思われるかばかりを考えてしまったのです。しかしやってみました。すると次の日ある女性が私に話し掛けてきました「あなたの意見すごく良かったわ、重要な問題だから頑張ってね！」またしても私は新たなものを手に入れました。人前で意見を述べられること、それが人を惹き付けたこと、そして次への自信です。これらの体験から私が得た事、それは「恐さに立ち向かう事が新たな希望を生む」ということです。恐さは人それぞれであり、例えば人にどう思われるか、自信のなさ、自分の立場の危機、プライド等がありますが、もし自分がやってみたい、やらなければいけないと思うのであれば、ただやるのみです。そうすれば、次に自分がやるべき事がおのずと見えてくると思うのです。私は未だ自分の道を模索中ですが、この気付きを心に持てただけで今後の物事の取り組み方が変わってくると確信しています。今後は自分の語学能力を高めると共にMRAの精神を学び、自分はどう歩むべきなのか、日本はどう変わっていくべきか、世界はどうしたらよい方向に向かうのかを考えていきたいと思っています。　（以上）

○○○　コー・スカラーズ・プログラムに参加して　○○○

池間　淑恵

この夏、私はコーで『一生の仕事（Job for Life)』を見つけました。それは、ピースメーカー（平和作りに貢献する人）です。一ヶ月間参加したコー・スカラーズ・プログラム(CSP、Caux Scholars Program)で、その道具と用意のための特訓を受けたこと、その仲間とコー・ファミリーとの生活の中で、自分も貢献できる者であることを学んだからです。同時にその決心が持てた時点で、私は、自分自身のことで精一杯だった長い思春期から、やっと大人、社会人としてのステップを踏み出せた自分を確認できました。その時、目からうろこが落ちるような、涙がポロリとするような安心感と喜びを覚えたのです。

CSPは、毎年世界各国から20名前後の学生を集め、紛争解決のための理論を基に、各地の紛争の平和的解決にどう取り組んでいくべきかを学ぶプログラムです。将来の和平の仲介役、ピースメーカーを育てる目的で10年前に始まりました。今年は15ヶ国から21名の多彩な人々が集まりました。焦点の一つは、テロリズムの影響と今後の対策でした。テロリストとは、それぞれの立場、見方で変わってしまうこと。メディアにより、各地の弱者の運動にテロリズムのレッテルが乱用される恐れのあることが確認されました。

パレスチナ・ガザ地区出身のアマール、イスラエル・エルサレム出身のデビットは日常の悲惨な状況を訴えながらも、お互いの友情・理解を築き上げました。カナダ出身のジェスィーは、アメリカ人の講師ベリーに対し、激しいアメリカ外交政策への批判をしたため、両者の関係も険悪になってしまいました。しかし、最後には、お隣の国同士仲良くして行こう、と和解しました。フロリダ州育ちのライアンは、今回、コーに充満したアメリカ外交に対する批判に驚き、ショックを受けたことを詩で表しましたが、この批判を受けとめ、真のアメリカ外交の在り方を考えるため、バランスの取れた視野を養っていこうと決心しました。外交とは、国の行政トップのレベル（トラック1）だけで行われるものではなく、市民レベル（トラック2）の一人ひとりの参加、お互いの友情の蓄積というものが基となり、一人ひとりがそれぞれの使命を果たせば、実際に国際情勢をも動かしていけるのだということを学びました。21名一人ひとりと1ヶ月向き合う中で育ったお互いへの理解と友情は生涯の財産です。「自分の国の問題解決に貢献するんだ」と言う彼らを私は心から尊敬しました。今夏は出会いの始まりであり、　お互いをサポートし合うネットワークを育て続けて行くことを確認して、

それぞれ帰途に就きました。

私は、アメリカの大学で心理学を専攻し、特に、死と喪失の心理学の中の、ヒーリング・プロセス（回復へのプロセス）に大変興味を持ちましたが、それが、国の再建の中にもあることを今回確認しました。子供や愛する人を戦禍や事故、或いは、貧困の中で失った人々が、それをどう乗り越え、将来に向けて生きる決意をして行けるかということなどです。人間は第3者のちょっとした動機付けや励まして、自らの力で立ち直っていくことができます。その孤独なプロセスを側で理解してあげる人がいることが助けになります。実際にその悲しみを乗り越え、尊厳を持って生きることを決心し得る人間の可能性、偉大さに、常に尊敬と希望を覚えます。

アフリカからのある参加者が言った、「アフリカでは、希望というのは贅沢品でしかあり得ないんです」という言葉を忘れてはいませんが、希望を持たなくては、建設的な前進はないと伝えて行きたいと思います。ピースメーカーというのは、個人の生き方そのものなのだということです。どんな状況に置かれても幸せになる能力とコスモポリタンとして生きることを学生時代に教えられましたが、それを実際に社会の中で活かす必要性を、コーでの人々との出会いの中で学びました。大学を終えて、来る予定ではなかった東京で生活しようと今回決心したのも、心から敬愛できるＭＲＡの方々とのコーでの出会いがあったからです。

（以上）

▼▼ＣＲＴ日本委員会ニュース▲▲

第１７回経済人コー円卓会議

ＣＲＴグローバル・ダイアローグ（メキシコ会議）報告

ＣＲＴ日本委員会事務局アシスタント・コーディネーター　石田　寛

去る９月５日（金）～７日（日）にメキシコで開催された今年度ＣＲＴグローバル・ダイアローグについて要旨をご報告します。今回は、メキシコ・Queretaro（ケレタロ）のホテル・ミッション・ジュリキラで開催されました。米国２１名、メキシコ３名、イギリス２名、ドイツ、オランダ、カナダ、マレーシアから各１名、そして、日本の、橋本徹（富士総合研究所理事長）、内田勲（横河電機代表取締役社長）、内田欽也（キヤノン常務取締役）、吉岡博（メキシコ日産自動車社長）、渡邊彰（伊藤忠メキシコ会社社長）、大石正樹（みずほコーポレート銀行メキシコ駐在員事務所所長）、金子保久（元国際科学技術財団事務局長）の各氏を合わせた３７名の正規参加者に加え、５名のオブザーバー、事務局９名の計５１名が参加しました。

９月６日（土）の夕食には、ケレタロ市長夫妻主催による晩餐会が市長公邸で行われ、大変温かい歓迎を受けました。また、９月９日（月）には、メキシコのフォックス大統領との会談が実現しました。この会談でDominic Tarantino氏が参加者を代表して、今回のコー円卓会議の討議内容を簡単に説明しました。この中で「経済界として企業倫理を確立するには各国政府と協力するべきと考えており、コー円卓会議では政府の行動指針の草案につき話し合いを行なった」ということが伝えられました。フォックス大統領はこの考え方に賛同され、メキシコ政府のコンタクト先を即座に示され、早速協議を始めるとの意思を表明されました。Tarantino氏と共に、カナダ人のDubee氏、英国人のBates氏、又、日本からは橋本徹氏の代理として伊藤忠メキシコ会社社長の渡辺彰氏が出席されました。

■グローバル・ダイアローグ

開会挨拶

まずこのオープニングセッションの前に開催されたGGB（Global Governing Board）会議の中で、Mr. Win Wallin（前グローバルCRT会長）は、グローバルCRT会長が、Mr. George Vojtaに引き継がれたことを報告しました。その後Mr. Win Wallinは、「テロリズムと貧困問題解決に向けて、今後Private Sectorがどう取り組んでいくべきなのかを真剣に考え、今こそ行動を起すことが必要である」と述べました。最後に、Mr. Win Wallinは、当会議のテーマに関して、「CRTは、特に貧困諸国に対して、開発・発展の正しい道のりを支援するために、グローバルな活動を促進しなければならない」と力説しました。

"グローバル経済の成長の促進について"～CRTのアクションプラン～

橋本徹氏（CRT日本委員会名誉会長、富士総合研究所理事長）が司会進行をされましたが、その中で、Mr. George Vojta（グローバルCRT新会長）は、現在の貧困問題が未解決である理由として、1．不公正や偏見の問題、2．政府支援の限界、があると説明しました。この問題の解決のためには、Private Sectorの果たす役割及び責任が期待されています。その中でＣＲＴが果たす役割として、今後、グローバル経済の成長を具体的に促進するため、"国家開発計画支援のための過程について"というプランに基づいて活動することを検討しています。

"グローバル・コンパクトの狙いとは？"

Mr. Fred Dubee（Senior Officer, The Global Compact Office, The UN）は、グローバル・コンパクトの内容や今後の活動について簡単に説明した後、「CRTとお互いに協力し合っていくことがとても重要である」と述べると共に、「特にグローバル・コンパクトでは、Transparency（情報公開）やCorruption（腐敗・汚職）の防止が盛り込まれていないので、この弱点を補うためにお互いにスクラムを組んでいくことの意義は大きい」とコメントしました。

"企業の社会的責任は経営目標たりうるか"

Ms. Sheron Watkins（Vice President, Enron Corp.）は、個人的な体験を通して、これまでのエンロン事件を振り返り、どこに問題点があったのかを述べました。結論は、以下の２点です。

1．各企業にある企業行動指針やコーポレート・ガバナンスを実践しなければ意味がない。

2．取締役会の崩壊が一番問題視されているが、やはり一人ひとりに道義的精神がなければ、いかなる不正を防止する機能があってもそれは無に等しい。

"CRTのSelf Assessment Improvement Process（SAIP：自己評価及び向上プロセス）について"
～グローバル・コンパクトのためのマネジメントツール～

Mr. Charles M. Denny（former CEO, ADC Telecommunications）よりSAIPに関する内容やこれまでの経緯について、説明がなされた後、現在SAIPのパイロット・テストを行っている企業の経営者からの途中経過の報告がありました。「この作業を通して言えることは、企業の大小に関わらずSAIPの質問事項（２７５項目）に答えることは容易ではないが、経営者と社員間のコミュニケーションが図れたことはとても有効であった」と強調しました。またこのパイロット・テストを行っている企業からは、「近々、良い結果を報告できると思います」とのコメントが寄せられました。又、「他のスタンダード（特にグローバル・コンパクト、ISO等）を分析することにより、SAIPを改善する余地がないか検討している」との報告がありました。

"メキシコにおける将来ビジョンについて"

Mr.Francisco Xavier Salazak Saenz（Subsecretario de Prevision Social）は、「メキシコにおいては、1．腐敗・汚職防止、経営者と労働者の良好な関係を構築するためにどうすれば良いか　2．一人ひとりのモラルをどう向上させるか、という２つの問題を解決に導くための方策を検討する必要がある」と述べました。

Mr.Carlos Acedo（Secretario General, INFONAVIT）は、「ビジネスマンのための教育として、真の人間としてのマネジメントの意味を見出すことを促進しており、特に企業倫理や企業の社会的責任に真剣に取り組んでいる。メキシコでも、このCRT一般原則を国内に広げていくことが重要であり、とくに労働者に対してCRTの考え方を正確に広げていくことに注力していきたい」と述べました。

Mr.Sergio Perlla（Vicepresidente COPARMEX Nacional）は、Mr.Fox（メキシコ大統領）の下における政治体制やメキシコ経済の問題をコメントした後に、「メキシコ経済を立て直すためには、1．最新の合法的な枠組みを開発すること　2．Private Sectorに活躍してもらうこと」、という２点が必要と強調しました。

"真の指導者について"

Mr. Kevin Cashman（CEO Leader Source）は、「経営者にとって一番大切なことは、真の指導力が何であるかに気付くことであり、これを発揮するためにも原則というものを備えれば、本当に社員が従うかどうか不安に陥

ることも少なく、社員たちも従い易いのではないか。又、社内でCRT一般原則を具体化するためには、経営者自らが日々この原則の意義を考えることが大切であり、習慣とならなければ意味がない」とコメントしました。また、同氏は、参加者に対して以下のような質問を投げかけました。

1．CRT一般原則の中で最も大切な条項はなにか？

2．何故その条項が、個人や職場での体験を通して最も大切だと言えるのか？

“企業が成長・繁栄するために”　～腐敗・汚職の防止～

Mr. Raymond Baker（Senior Fellow, Center for International Policy, Washington, D.C.）は、「腐敗の防止には金融機関のマネーロンダリングの問題をどう解決するかが重要である。この問題の原因は自由貿易によるところが大であり、今後このメカニズムをどう立て直すかが重要である。この問題解決に向けて、Private Sectorが果たす役割が大きく、特にCRTの活動に期待したい」と述べました。

“責任のあり方について”～CRT Principles for Governmentについて～

Mr. Steve Youngは、「世界をより良く変えるためには、企業だけでなく、政府にも働きかけることが必要である」と語った後に、CRT Principles for Government（案）について簡単に触れました。

Mr. Herman Wijffels（Chair, Economic and Social Council, The Netherland）は、「このグローバリゼーションの潮流において、Private SectorとPublic Sectorを結びつけることが必要であることは周知の事実であるが、そのためにも各国政府がこのCRT Principles for Governmentを理解し、遂行することが必要である」と述べました。

“CRTの今後の方向性について”

Mr. George Vojta（President of CRT, Founder, Standards Forum）は、今後CRTが進む道として自らパワーポイントで紹介した内容を説明し、「Private SectorとPublic Sectorを結びつけることが大切である。CRTにおけるGoverning BoardやGGBの意見交換を頻繁に行っていきたい」と述べました。
又、CRT Principles for Governmentについてはもう少し時間をかけて検討していくことになりました。

尚、今回のＣＲＴグローバル・ダイアローグに参加された金子保久氏から頂いた報告（印象を含む）は以下の通りです。

1．ＣＲＴの新時代・・・将来へ向けて

（1）新ＣＲＴ会長の誕生（ＣＲＴの第3フェーズ(*)に入った）

（2）新規参加者の増加・・・過去の如く「固定化」された参加者が中心ではなく、新規参加者が中心

（3）活動目的に沿った実行動を如何に実現してゆくかが今後の課題

（4）日本よりの参加者は人数は増えているものの、核となる参加者の開拓が将来のポイント

（注*：第1フェーズ；通商問題を中心とした対話、第2フェーズ；全世界のビジネスマンでプリンシプルを作成、第3フェーズ；実行のフェーズ）

2．今会議での所見

エンロン問題からの検討課題[不祥事件]

“内部告発”に依るケースが殆どであり、エンロンも勇気ある告発者（ホイッスル・ブローアー）が存在した事による。”ホイッスル・ブローアー”が出る為の環境作りが必要であろう。つまり、ホットライン制度及び告発者の法的保護を課題としたい。正しい経営が行われる為の規範・社則・社員教育等も勿論必要であり、その推進と共に上記のホットライン制度と告発者の法的保護策を考える時だと思う。

（以上）

◇ 第25回IC(MRA)小田原国際会議レポート ◇

21世紀を対話と和解の世紀にするために
～一人ひとりが変化をもたらすイニシエーターとなろう～

去る6月7日（金）から9日（日）まで第25回IC(MRA)小田原国際会議が、『21世紀を対話と和解の世紀にするために～一人ひとりが変化をもたらすイニシエーターとなろう～』のテーマの下、アジアセンターODAWARAにて開催されました。海外からは、ノルウェー、スリランカ、韓国の方々に加え、アクション・フォー・ライフ（＊）のプログラムに参加したメンバーの中から、南アフリカ、モルドバ、レバノン、オーストラリア、ニュージーランド、韓国の6名の青年男女が、そして、そのグループのコーディネーターの台湾と韓国の方々を合わせ計14名が来日しました。又、日本で学ぶセネガル、ケニア、ルーマニア、ブラジル、アメリカ、マレーシア、そして、フィリピンからの留学生や日本在住の、イギリス、ドイツ、アメリカ、中国等からの参加者を加え、計20ヶ国から延べ150名が参加しました。今年の会議は、アクション・フォー・ライフの青年たちに加え、各国の留学生、そして日本からも多くの大学生が参加するなど、大変活気に溢れたものとなりました。

アクション・フォー・ライフ（＊）：次代のIC(MRA)を担う青年達を育てるべく、2001年9月よりインドのIC(MRA)センターをベースに始まった一年間にわたる訓練プログラム。16ヶ国から様々な宗教や背景を持った青年34名が参加した。インド各地を回った後、マレーシアをベースに東南アジアを回るグループと、台湾をベースに韓国、日本、中国等を回るグループに分かれ、今回、日本には6名が来日。7月24日から8月2日まで、マレーシアで開催された第10回IC(MRA)アジア・太平洋青年会議でそのプログラムを閉じた。

対話と和解の２１世紀のために

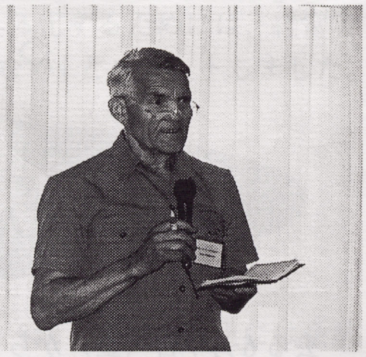
開会にあたり、橋本徹国際ＭＲＡ日本協会会長は、『一人ひとりが変わることにより、回りをも変えてゆき、そして、世界が変わってゆくことを期待しています。現在、家庭、企業、政治など、色々な所で多くの問題が起こっています。こうした世の中を良い方向に変えるためにはどうしたらよいか？そのためには、ＩＣ/ＭＲＡの活動こそが大変に重要と思います。我々は色々な宗教、信条を持っていますが、共通して言えることは、自分を変えるためには、自分を超越した神の力によって、神の前に謙虚に、そして自分を低くして、他の人々のために奉仕するという考え方に変わらなければいけないのではないかと感じています。』と述べ、この会議を通して参加者がそれぞれ何かを体得して世界の平和につなげて欲しいと結びました。

続いて日本の長年の友人である、ノルウェーのイエンツ・ウィルヘルムセンさん(IC/MRA専従）は、海外からのゲストを代表して、『対話と和解の２１世紀～誰もが変革のイニシエーター～』のテーマで次の様に述べました。

『対話と和解について語る時、私の頭に浮かぶのは、20世紀に起こった紛争や流血の惨事の多くはヨーロッパに端を発している、ということです。現在、ヨーロッパはEUの誕生によって20世紀の病であったナショナリズムを克服しようとしています。さらにグローバル化によって、全人類の経済的、文化的統合が進みつつあります。移民もこの傾向に影響を与えています。サッカーのワールドカップの参加チームにも見られるように、異文化間の対話の前提条件も現在の方がずっと整っていると思います。しかし、互いに相手を知り合い、依存しあうことと、より公正で平和な世界を造るということは同じではありません。9月11日の同時多発テロがそれを示しました。移民人口が増える中でフランスやオランダ等に見られるように、反移民の右翼政党が台頭しつつあります。これら政党の背景には

●共に歌う若い参加者たち

恐れがあります。移民によって自国のアイデンティティーが脅威にさらされることを恐れ、又、国の富を分かち合いたくないのです。このような急速な変化と混迷する世界の中で、勿論、国連やより良い世界の統治を行うための組織・機関を強化することは不可欠です。しかし、同時に個々人、また、それぞれの国の中にある善と悪との戦いという深いレベルでの精神的な心の葛藤があります。それを認めたくない人たちは、その悪に支配されてしまい、その結果は、テロ行為やアルカイーダの憎しみの中に明白に表れています。同様に、富める国における、弱者や無力な人々に対する無関心があることも明白です。私は第二次大戦中、ドイツのノルウェー占領に反対する地下抵抗組織に参加しました。終戦後、私はドイツに対して憎しみを抱き続け、ドイツ人は冷酷で劣った民族であると信じていました。私はMRAに出会った時、妹に対する嫉妬心と、そこから来る攻撃的な言動が自分にあることに気付きました。時にはそれが冷酷な仕打ちとなることもありました。私は、人間の本性は何処でも皆同じで、私自身もドイツ人と何ら変わりはないと悟り、その時、ドイツ人を許すことができました。私が1948年にMRAの仕事でドイツに招かれた時、行く決意をしたのも同じ思いからです。ドイツ滞在中の5年の間に、あの奇跡の独仏和解を経験しました。21世紀を名実共に新しい世紀にするには、過去を引きずっていてはだめです。また、過去の傷が癒されない所に未来はありません。このことはユーゴスラビアや、バルカン半島が示しています。歴史の事実に共通の理解を示すことが重要です。過去に対する共通の理解があれば、過去と訣別することも容易です。また同時に相手を許そうとする意思が大切です。欧州では、憎しみを世代から世代へ引き継いできました。許すこと、復讐心を忘れることは一つの決断です。対話と和解をもたらす上で大切なのは宗教です。変革のイニシエーターになるには、まず自分から変わらなければならないという点で全ての宗教は一致しています。仏教では、「たとえ戦場で千人を征服し得ても、真の勝利は自分に打ち勝つことである」と述べています。また鈴木大拙は著書の中で禅宗を次のように西洋に伝えています。「禅宗には‘悟り’がある。それにより永年積もり積もった固定観念を取り除き、新しい人生の土台になる精神的革新が生まれる」と。そのような固定観念から自分を解き放すことによって私たちは謙虚になることができ、そこに精神的な成長の扉が開かれます。神がわれわを愛し許すように、われわれも互いに相手を許すべきです。しかしながら、精神的な革新は生涯続けなければなりません。人は身体に良いものを見出すために莫大な費用をかけますが、精神的な糧についてはあまり考えません。私は規律が精神を養う鍵になると信じています。MRAの創始者フランク・ブックマン博士は早朝に起き、神あるいは心の声に耳を傾け、自らが信じる最も深遠な価値観をどのように実践するかを心に描きました。博士が強調したことは、十分な時間をとり、心に浮かんだことは必ず書き留めるということでした。これは、国の指導者が社会や一国を正しい方向へ導くためにも必要です。50年前アラブ連盟の事務総長アソーナ氏はこの考えに立って行動した結果、中東の戦争を回避することが出来ました。歴史家や未来学者は21世紀はアジアの世紀になろうと予言しています。しかし、インド・パキスタン紛争は、アジアがヨーロッパの犯した過ちを繰り返すのではないかと警告しているようです。ヨーロッパの過ちは過去のものと片付けてしまっては破滅を呼ぶだけです。アジアには別の道を選ぶ自由があり、それは、この会議のテーマを真剣に受けとめる人々によって決められる道でなければなりません。誰もが変革のイニシエーターになれるのです。』



●ウィルヘルムセン氏

続いて、羽田孜元首相は、『MRA活動を推進しようという議員連盟のメンバーは現在38名です。他にも賛同する議員は多く、谷川議員と一緒に更に活動を進めてゆこうと思っています。なお、韓国の弁護士で国会議員のユンさん。昨年、スイスのコーでお目に掛かり、この会議にも来られる予定でしたが、ご都合で来られなくなりましたが、韓国でもMRA推進議員連盟を結成され、日本より多い51名の議員が参加し、活動を展開されています。今後、日韓で相互交流を図って行く事になっています。』と述べ、又、パキスタンのムシャラフ大統領と会われ印パ関係の改善のために働きかけておられる経緯についても話されました。

最後に相馬雪香国際MRA日本協会名誉会長は、『世界の平和が簡単に出来るものだと思っておられますか？誰かがやってゆかなければなりません。そういうことを、一人ひとりが本気に考え実行することが大切です。私のような欠陥の多い人間でも、何かのお役に立つ、そういう気持ちで今日までやって参りました。今まで、お聞きになったことを、明日の朝、お考え頂きたい。実は、日本女子大学をお造りになった成瀬仁

蔵先生が、「早朝静思」、早朝静かに聴く、思う、心に浮かんだことを、手帳に書き留めるということをおっしゃった。それが、先生の信念でした。先生は、大学をお造りになる前に、アメリカからヨーロッパに行かれた。アメリカで、ムーディーという、当時有名で、ヨーロッパにも大きい足跡を残した方に会っておられます。MRAのブックマン博士も、そのムーディさんに会っておられる。そういった縁を活かし、私達もその一部になって、世界のために動くことが出来るかどうか、今日はその始まりだと思います』と結びました。

アガペとアクション・フォー・ライフの活動について

翌朝は、恵子・ホームズさんから、『心の癒しと和解のためのアガペの活動について』のテーマで、又、アクション・フォー・ライフのプログラムを発案し、その実現のための中心になった台湾のリュウ・レンジョウ（劉仁州）氏からは『アクション・フォー・ライフの目指すものとその成果』のテーマでの講演がありました。

恵子・ホームズさんは、300人のイギリス兵が、シンガポールで日本軍の捕虜となり泰緬鉄道の建設に使われた後、故郷である三重県の紀和町の捕虜収容所に収容され炭鉱で働かされていたこと、又、病気や怪我、そして希望を失って亡くなった16人の若い英兵達のために村の人たちや鉱山会社が協力し合い、山の麓に素晴らしいお墓を作り、十字架や花を捧げ、亡くなった方たちの名前を大理石に刻んでいたことなどを知り、ご遺族の方々にこのことを伝えたいと考えました。その後の経緯について、次のように述べました。

『そこで働かされ、無事に帰った人たちをこのお墓にお連れして、日本の人たちと一緒に追悼式が出来たら、どんなに素晴らしいだろうと思いました。しかし、捕虜だった人たちにどのように会えるのか分かりませんでした。1年間祈り続け、奇跡が次々と起こり、紀和町の炭鉱で働かされていた元捕虜の1人、ジョー・カミングさんに巡り会えました。そして、彼を通して、更に数人の人たちに会うことが出来ました。初めは日本人に対する不信感から、嫌がりましたが、次第に会ってくれるようになりました。

1991年、ロンドンで全国捕虜大会があったので、切符を売ってくれるように頼みましたが、「日本人に売る切符はないし、来てもらいたくない」という返事でした。そこには、かつて日本軍の捕虜だった千人の英兵たちと、その家族の人たちが集まっていました。私が日本人だと分かると、「日本人は大嫌いだ、帰れ」、などいろいろな言葉が飛んで来ました。しかし、彼らの目を見て、その苦しみを感ずることが出来、恐れではなく、彼等に対する神の愛に心が満たされ、お墓の写真を見せ、そこに来た理由を説明したところ切符を売ってもらえました。非常に重苦しい雰囲気で、会は進行して行きました。その中で、捕虜の人たちやその家族が、どんなに苦しんでいるのかということを知りました。彼等の心の痛み、そして、やるせない思いを感じました。その時、神が、私の愛を彼等に伝えて欲しいと言っているように思いました。私は日本人が、そして日本軍が犯して来た罪のことを神に謝りました。すると神は私の心に「私は日本人も同じように愛しているのだ。私の十字架は世界人類のためだ」と言ってくれました。そこで、戦争で傷ついた人たち、紀和町の銅山で働いていた人たちだけではなく、そこに集まっている東南アジアの色々な所で働かされていた人たちも含めて、日本にお連れして、心の傷を癒して頂き、日本人と和解してもらいたいと思いました。主人が亡くなり絶望の淵にいた時に、神が聖書の御言葉から励まし、「一緒に働こう」とおっしゃいました。当時それが何を意味しているのか分かりませんでしたが、この時に、あの時神が言われた言葉はこのことだったのだ、ということが分かって来ました。それから、多くの障害を乗り越え、1992年に、26人の元捕虜の人たちと共に、紀和町を訪れることが出来ました。多くの町の人たちが心から受け入れてくれました。日本に行けば、自分たちの戦争が終わるのではないか、憎しみを持ったまま墓場に行きたくないと決心した人たちが、仲間たちからは、裏切り者として村八分にされながらも日本に来ました。彼等は日本人と共に、墓の前で追悼式を行い、戦友たちに敬意の念を表することが出来ました。かつての日本の兵隊さんたちも、過去を詫び、許してもらうことが出来ました。それから10年、心の癒しと和解の旅は続いていますが、多くの人の心が癒されました。ある時、80才以上のハリーという車椅子で日本を訪れた元捕虜の人がいました。それまでは日本人への恨みで、身体も固く、とても辛い日々を送っていたのですが、かつて自分が働いていた山口県の大美祢という炭鉱を訪れ、

●恵子・ホームズさん

そこで町の人たちに大歓迎されました。看守だった人たちが来て謝りました。その後、ハリーの義理の息子さんから手紙が来ました。「行く前は日本をあまりにも恨んでいたので、心が暗く、辛い日々でした。しかし、日本の方たちとの心のふれあいを通して、義父の心は少しずつ解きほぐされ、喜びいっぱいで帰って来ました。そして、今は、車椅子の生活ではなくなりました。明るく元気で、日本で経験した思い出話しばかりしています。」かつての兵士達は、周りの人たちから、「この頃若返ったね」と言われるそうです。又、「日本で元の兵士たちが謝ってくれ、それを許した時が最高だった」と皆が言ってくれます。このような喜びの陰には、多くの日本やイギリスの人たち、そして、日本企業や英国の企業の真心の協力があります。そして全世界に散らばっているクリスチャンが、何時も祈ってくれており、そのお蔭で、今日まで続けて来られたのを感謝しています。』

続いて、リュー・レンジョウ氏は次のように話しました。

『恵子・ホームズさんがされている活動はこの地域、日本、そして世界にとって、非常に貴重な活動であると感じました。我々も、憎しみ、憎悪、フラストレーション等に対処し、共に、過去の歴史の傷を癒し、新しい未来を築いて行かねばなりません。

私は、「アクション・フォー・ライフ」の様な教育プログラムのエキスパートでもなく、専門知識も持っている訳ではありません。

私は10代の頃、家を飛び出し、物を盗んだりごまかしたりという毎日を送っていました。両親にいろいろな苦しみを与えました。しかしMRAに出会い、私自身の生活に光が当てられました。その結果、人に対してケアをする、或いは社会の為になるには、先ず自分がやってきた過ちを正し、私自身から変わらなければいけないということを学びました。この経験から私が学んだことは、「先ず心の声を聞き、自分の心の最も深い所にある、私がしなければならないことを見付け、それを行うコミットメントを持つこと」でした。

もし自分に選択肢があったなら、この「アクション・フォー・ライフ」はやらなかったと思います。代わりに台湾にいて、私が始めた「家族の為のプログラム」をやっていたでしょう。又、もし選択肢があったなら、今参加している若者たちを選ぶことはなかったと思います。何故ならば、彼等は、私の頭痛の種でもあるからです。昨年9月にインドで、初めて、「アクション・フォー・ライフ」の参加者たちに会いました。彼等と8ヶ月間行動を共にして、徐々に家族の一員であるかのような気持ちを抱くようになりました。生活を共にし、彼等の成長を目の当たりに見ることも出来、又、彼等の成長の一助となることも出来ます。彼らの精神状態がいい時には、人に対してベストを尽くしており、それを見るのは大きな喜びです。しかし逆に、お互い仲良く出来ず、他の人に何も与えられないような状態を見ると、イライラが募ります。そのような時には、いろいろな家族の背景があり、子供の頃の苦しみもあっただろう、だからこそ、今の人格があるのだと思って納得しました。私は彼等を裁いたり、批判する立場にはありません。何故かというと、彼等を受け入れて理解し、彼等自身が自己を見つめ、理解・成長するのを助ける為に、このプログラムを作ったからです。この8ヶ月、私も彼等からいろいろなことを学びました。

このプログラムのため、多くの方々が10ヶ月間、自分の仕事を離れ、助けてくれています。妻も、日本に来る前に、共に韓国に行っています。又、これから2ヶ月の間、中国、香港、マレーシアと、このグループと行動を共にします。

「アクション・フォー・ライフ」のプログラムでは、参加している者が人前に出たり、人に会って話をするというだけではなく、かなりの時間を、自分たち自身のために費やしました。また、グループの中で時間をとって、お互いに感じていることを、正直に話し合うという時間を持っています。

今、この8ヶ月の活動を振り返って見て、戦争という言葉が私の頭に浮かんで来ます。というのは、このプログラムは9月11日のニューヨークの同時多発テロの直後に始まっているからです。国同士の戦争だけではなく、グループ内でも争いがあります。例えば韓国に行った時に、7人が同じ所に暮らして、1つのトイレ、1つの風呂を共有しなければならなかったのです。

●リュウ氏（左から2人目）と「アクション・フォー・ライフ」のメンバーたち

また人前で話をする場合にも、話しをしたい人、したくない人の間に争いがありました。戦争は決して遠くで起こっていることではなく、我々の中にあるのだと気付きました。何か問題があった時には、イライラの原因を話す為に、皆で話し合いました。チーム・スピリットがなければ、先に進む事が出来ないからです。完全に本音が出て来るまで話し合い、問題の責任は皆が持っていると気付きました。

この10ヶ月間のプログラムが終わった時には、参加したそれぞれが、紛争解決の専門家になれるでしょう。嬉しいことは、この8ヶ月の間に、一人一人が自分の人生をどのように過ごし、自分の人生の意義は何であるのかという明確な回答が得られたことです。このプログラムの最も重要な目的は、参加者一人ひとりが、自分が何をなすべきかを見付ける手助けをするということにあります。そして、お互いに助け合い、一生を通じた友情を分かち合うようになることにあります。来年末には、第2回目を計画しています。

MRAは、自分、家族、国のためだけの人生ではなく、それを超えた人生を求めるという課題を提供します。「アクション・フォー・ライフ」は、MRAの理念・考え方を、個人の生活にどのように反映することが出来るかということを提供してゆきます。MRAの考えは、決して何か大きな、遠くに離れた所にあるものではなく、個々人の生活の経験の中にあります。また、そのコミットメントにあります。』

日韓の対話

8日の午後には、『相互理解と和解のための日韓の対話』のテーマの下にパネル・ディスカッションが行われました。

最初に基調講演を行った、相馬雪香国際MRA日本協会名誉会長は、次のように述べました。『韓国にはいろいろご縁があります。学校で同級におられた方、その方の苦しみも見ていました。何かしたいと思っても、何もできない。しかし、MRAに会って、人のことを指さすのを止め、自分の中の悪いものを見ること、自分の心の中を掃除するということから始まった訳です。戦争を通して、どうしても私たち女は、自分たちのことを、そして生まれて来る子供たちの未来を思い、明日をより良い社会にしなければという気持ちになります。結局は、人に期待するのでなく、自分から始めるしかありません。それをやっていると、不思議なように、同じ気持ちの方が、あっちにもこっちにもいらっしゃる。顔が違い、なりが、違っても、求めているものは同じです。日韓女性親善協会を始めて、今年で25周年です。韓国にも韓日女性親善協会を同時に発足して頂きました。長い戦後の期間、韓国との間に、いろいろなことがあった時にもMRAを通して答えが出たことも随分ありました。しかし、うっかりしていると、また、何か余計なものが入って来ます。自分の心にあるよこしまな心や、欲張りの心が、自分の中にあることをつくづく感じています。ここに来ていらっしゃる20ヶ国の方々も、それぞれのお国で、いろいろ問題があることと思います。問題は日本だけではなく、共通の問題。それに対する答えは、過去のわだかまりを捨てて、明日に向かって、自分の心の掃除を始めることだと思います。』

続いて、カンボジアの地雷撤去を初め世界で様々な援助活動に取り組む韓国からのパネリスト、パク・チョンス（朴　清秀）女史（圓仏教江南支部責任者）は次のように語りました。

『日韓の悲しい歴史が始まったのは、1910年。その頃日本は、いろいろな点で韓国よりも強い国であり、韓国を1945年まで36年間にわたり植民地化しました。その間、韓国人は長い抑圧の中で虐げられました。私の子供の頃、我々は強制的に日本名をつけられ、又、母国語である韓国語でなく日本語を話さねばなりませんでした。作付けした米は全部日本人に取られ、ほんの少しの雑穀しか食べられませんでした。若い韓国の男性は戦争にとられ、戦死しました。若い韓国女性は、従軍慰安婦とされました。我々はこういったことを、戦争の記録として残し、次ぎの世代に伝えて行こうと思っています。そのため韓国人は日本人を嫌いになり、憎むようになりました。私もその一人でした。日本に対する憎しみは相当なものでしたが、1987年にスイスのコーに行き、心の

●パネリストの皆さん

傷を癒すことが出来ました。以来、多くの日本人の方々と友人になりました。その方々は、私の心の傷を癒して下さり、又、スイスのシルビアさん（MRA／IC専従）は、私が日本人に対し抱いていたわだかまりを捨て和解する手助けをして下さいました。

ある時、コーからピクニックに出掛けましたが、その時のお弁当は、日本の方によってとても丁寧に作られていました。それを作ってくれた人たちは、過去の戦争とは何の関係もないと気付きました。

我々はこの地球村に住んでいますが、過去の色々な誤った歴史の遺産を引き継ぎ、更に間違った歴史をさえも作ろうとしています。MRAの方々は、間違った過去の歴史にとらわれず、むしろもっと生産的な創造性のある生活をしようと考えておられます。MRAは、過去の間違いをきちんと謝罪し、それを受けた人が許すという和解をもたらす舞台です。韓国と日本の人々が心をもっと近く寄せ合って、お互いに心を開いて、勇気を与えることが出来れば、良い友人になれると思います。日本と韓国は人種は同様でも、異なった歴史・文化を持っており、習慣や考え方も違います。しかし、お互いの良い点を学びあい、違いを尊重することが出来れば、個人的にも国家的にも色々な問題を乗り越えることが出来ます。日本と韓国が、更に協力し、途上国の平和構築のためにエネルギーを注げれば素晴らしいと思います。その為に日韓両方のMRAの方々が一緒に活動出来ればと望んでいます。』

続いて、日本からのパネリストである恵子・ホームズさんは次のように述べました。

『マザー・パクが、日本に対して心を開き、和解の提案をして下さいました。この呼びかけに応えてゆくことが大事だと思います。世界には色々な人種が入り交じって生きていますが、それは、お互い学びあってより良いものへと成長して行く為に、神が違いを認めていらっしゃるのだと思いました。

関東大震災の時に、韓国人が日本で、井戸の中に毒を入れたという噂が流れ、その為に今でも韓国人を許せないでいる日本人がいるということを、ある方から聞きました。そのことで日本人が韓国人を許せないのなら、韓国人の日本人への恨みはどれほど大きいものでしょうか。私達が韓国の人達に犯して来た罪は、数え切れない程あります。豊臣秀吉の時代から、韓国を荒廃させ、又、韓国の技術者などを日本に連れてきて、日本人の為に彼等を利用して来ました。過去36年間、韓国を占領し武力で韓国を統治してきました。その間に、どれだけ多くの韓国人が日本人の為に犠牲になって来たかと思います。私達は多くの国を辱め、武力で威圧して来ました。多くの国から呪われている国です。多くの人から呪われている国は繁栄してゆくことは出来ません。私達は過去を隠すのではなく、過去を認め、悔い改めてゆかねば、発展は得られないと思います。ドイツは世界に対して自分たちの過去を告白し、謝罪して来ました。それによって、ドイツは世界で高い評価を得ています。聖書には自分の罪を告白し、悔い改めるならば、その罪は許され、神の大きな祝福を受けると書かれています。私達は自分たちの過去を詫び、清算してゆかねば、幾ら東南アジアに援助金を送っても、大きな効果を発揮出来ません。東南アジアの国々で現地の人から、「ビジネスの為に表面上はうまくやっているが、内心では、何時、日本人に復讐してやろうかと考え続けて来た。親、親類、友人などから、日本人を決して信用してはいけないと教え込まれて来た。だから、日本人に対する不信感が拭い去れない」といったことを聞きます。しかし、私たちが罪を告白し謝罪してゆく時に、その人たちが涙を流しながら、「私たちは日本人の過去を許します。お互いに手を取り合って未来の為に働いて行きましょう」と言ってくれることがあります。人を変えるのではなく、先ず、自分が変わることがMRAの精神です。日本人は先ず他国に要求する前に、自分たちの犯して来た罪の一つ一つを深く反省し、アジアの国々に、また、戦争で捕虜となった国々の人たちに、心から謝ってゆかなければいけないと思います。真心の謝罪は、相手を癒します。また、自分が許されます。それが双方に平和を与え、希望と新しい出発をもたらせます。先ず、私たち、気付いた者一人ひとりが率先して過去を学び、悪かったことは素直に、日本が被害を与えた国々の一人ひとりに、謝ってゆこうではありませんか。そうすれば許せず苦しんでいる人たちが解放されます。恨まれて来た日本が呪縛から自由になり、神の豊かな恵を受けることが出来ます。過去を清算したら、共に手をとって、未来を、希望をもって開拓出来ると信じます。』

続いてもう一人の日本からのパネリストである衆議院議員の谷川和穂氏は次のように述べました。

『37年前の1965年6月、戦後14年かかった日韓基本条約が調印されました。調印式は東京で行われ、韓国の代表としてイー・ドンウォン（李 東元）外務大臣が来られました。彼のご両親は戦争前に、日本が韓国を併合した日韓併合に反対して、何度も投獄されました。イー外務大臣ご自身も、大学生の時に、両親の所在を言えと日本の官憲から迫られ、投獄されました。

これは直接同氏から聞いた話ですが、石の床の上に寝かされて、口の中にホースを入れられ、バケツで上から水を口の中に注がれ、見る見るうちに自分のお腹がふくれ上がっていって、気が付いたら病院のベッドだったそうです。6月23日、調印が終わった翌日に、東京の或るホテルの一室で、イー外務大臣ご苦労様でしたという会合を、アジア議員連盟名で行い、私は司会役を仰せつかりました。その時大臣が、「これから日本語で喋ろうか」と言われました。私は、日本語で喋ったりしたら、帰国されてえらいことにならないだろうかとの危惧を抱きましたが、大臣はニッコリ演壇に立たれて、「私は20年間日本語を喋っていないので私の日本語は錆び付いていると思います」と、日本語で切り出されました。話しが終わった時、万雷の拍手が起こりました。これで日韓14年の懸案が纏まりました。

それから半年後の12月、今度は日本の外務大臣が初めて韓国に公式訪問をする事になりました。椎名悦三郎大臣。金浦飛行場に降りた途端に多くの報道陣が押し掛けました。「36年間貴国にかけた迷惑を、日本国外務大臣として心から申し訳ないと思います。」日韓基本条約調印後、日本の外務大臣が初めて訪れた韓国の国土で最初に述べた言葉でした。

ここに、昨年の12月23日の天皇誕生日の記者会見の時の新聞記事を持って参りました。天皇陛下が、桓武天皇のご生母が百済の武寧王の子孫であると、続日本書紀に記されていることに、韓国とのゆかりを感じておられる。「武寧王は日本との関係が深く、この時以来、日本に五経博士が代々招聘されるようになりました。また、武寧王の子、聖明王は日本に仏教を伝えたことで知られています。然し、残念な事に、韓国との交流は、このような交流ばかりではありませんでした。この事を私達は忘れてはならないと思います。」と述べておられます。今回のワールド・カップの開会式は韓国のソウルで開かれました。そこへ高円宮殿下、同妃殿下が、天皇のご名代でご出席されました。高円宮殿下は昨年12月、天皇誕生日の時の天皇の記者会見の御言葉を、充分ご記憶の上で韓国に入られたと思います。日本の皇室が韓国に入られたのは、公式には、この開会式が初めてです。高円宮殿下は発言としてはなさらないとしても、「ご先祖様の地に里帰りさせて頂いた」とお考えなりながら、無名戦士の墓に花束を捧げてお参りされた時も、心から、韓国民の安寧を祈念されたのではなかろうかと思います。』

パネル・ディスカッションの最後に恵子・ホームズさんは、韓国の人々が日本から受けた長年の苦難に対し心からの謝罪をされました。これに対し、韓国のパク・チョンス女史が、「これまで、自分は、個人のレベルで韓日の和解を進めては来ましたが、これからは、それが国や国民的なレベルで行えるようにしていくために力を尽くす決心をしました」と恵子・ホームズさんの手を取りながら話された様子は参加者の感動を呼びました。

多様なプログラム

日韓のパネル・ディスカッションに続いては、『最近のスリランカにおける和平の動き』及び、『台湾での“効果的な親となるためのトレーニング講座”について』という二つの小セミナーが開かれました。スリランカからの参加者からは、「19年にわたって内戦の続いてきたスリランカに漸く和平の実現の望みが出てきましたが、平和の動きへの期待に反比例するように、戦闘で大量に出回った銃等を用いた強盗事件の増加等、治安の悪化が深刻になってきています。」との報告があり厳しい現実を知らされました。

同日の夜には「文化の夕べ」が開催され、パントマイムや詩吟、サッカーのリフティングから韓国の歌や三味線の演奏、そして最後には各国の青年達によるコーラスの披露と楽しい雰囲気が盛り上がりました。

●文化の夕べで演奏された津軽三味線

更に、その後には、昼間の日韓のパネル・ディスカッションに触発された、日本と韓国の青年を中心とした若者達が今後の日韓関係の在り方について夜遅くまで語り合い、これからの交流を進めていくことが申し合わされました。

3日目の日曜の午前には、「アクション・フォー・ライフ」のメンバーの6名の青年たちそれぞれからの話しがありました。南アフリカのムゲレザさんは、アパ

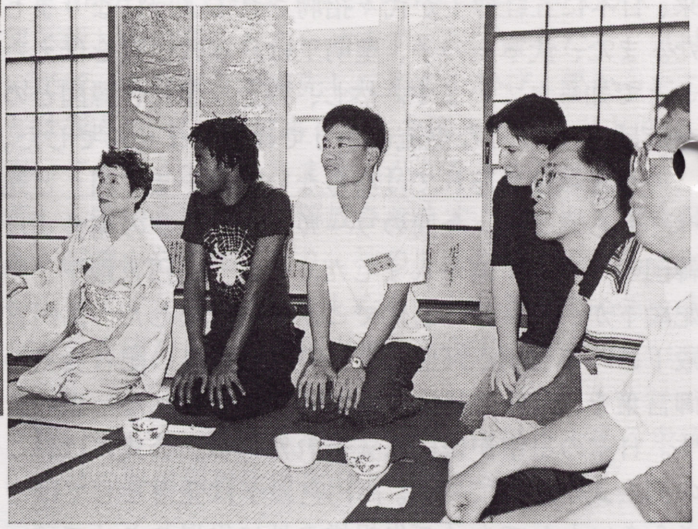
ルトヘイト（人種隔離政策）下で白人の人たちから受けた弾圧と彼らへの憎しみを如何に克服していったか、レバノンのワディアさんは中東に住むクリスチャンとしてイスラム教徒とクリスチャンの人々の架け橋になっていきたいという確信を、ニュージーランドのサラさんは中国語を専攻するなど持っていたアジアへの関心を、この「アクション・フォー・ライフ」の東アジア訪問で更に深めたこと、オーストラリアのローラさんは、自分自身の家庭での人間関係の問題の体験を通し、同様の問題を抱える他の若い人たちのために役立っていきたいという確信を述べるなど、それぞれの体験と、この「アクション・フォー・ライフ」のプログラムを通して学んだことを語り、留学生を初めとした多くの青年たちに強い印象を与えました。

●「アクション・フォー・ライフ」のメンバーを交えた分科会

会議を終えて

会議の前から既に小田原に入っていた数名の「アクション・フォー・ライフ」の青年たちは、小田原でホームステイをしながら、小田原城内高校、鴨の宮中学、そして箱根小学校などを訪ね、それぞれ自国の文化の紹介や「アクション・フォー・ライフ」の活動の中で学んだ、どのように違った文化や宗教等の違いを乗り越えて一緒に活動してこられたかといった話しを生徒達に語りかけ交流を図りました。会議の終わった後には、アクション・フォー・ライフのメンバー全員で、小田原城内高校、久野小学校、小田原城東高校、川瀬ファッション・アカデミーを訪ね、それぞれの国の紹介や、色々な難しい状況の中で、どのように自分を変えていったかという様々な体験等を話すと共に、生徒たちと直接話し合う機会も持ちました。その後、東京でもホームステイをしながら、鎌倉への訪問、茶道や書道の見学などの体験を通して日本文化の一端に触れると共に、大学生を初めとした青年たちとの交流も大いに図りました。（以上）

●「アクション・フォー・ライフ」のメンバーの久野小学校での交流



●城東高校で茶道を体験する「アクション・フォー・ライフ」のメンバーたち

※次ページに会議に参加したお二人の留学生の感想をご紹介します。

▲▲ 若者の力 ▼▼

ジョナス・フェルナンデス
ブラジル　筑波大学国際政治経済学専攻

小田原で行われたMRAの会議に参加できて、私の人生に著しい変化がもたらされたと思います。小田原国際会議に先輩から誘われた私が行く前に思ったのは、その会議に出席して、いろいろな国から来日した方々や日本でさまざまな分野で成功している方々と出会うのは非常にいい機会になるということです。もちろん、そういうこともありましたが、そういった方々のお話がこんなにも私の心に深く感じられるとは、このとき全く想像していませんでした。特に、「アクション・フォー・ライフ」の若いメンバーから自分の国の戦争や自分の家族の間で苦痛を味わった体験を聞かせてもらい、それぞれ皆さんが変化を達するためにどういう風に努力してきたかということが一番印象に残りました。悲しいと同時に美しい彼らの物語を聞いて、変化を達することができるのは特別な人に限られないことに気づきました。私と同じような若者たちが世界をよりよくしていくために努力する姿を見て、「私にもできるのではないか」と思いました。そして、今まで自分が想像もしなかった大きな若者の力が世界を変えていくためには、日々自分もしくは他人の生活に一つでも変化をもたらす努力が必要だと考えました。この会議で発見した大きな若者の力が自分を奮い起こしました。これから自分の国に変化を起こすために頑張りたいと思います。

●談笑する各国の留学生たち

（以上）

△△ チェンジの大切さ ▽▽

チョンガヌ・ミシェル
セネガル　筑波大学国際関係学専攻

6月7から9日の間に、小田原アジアセンターで、MRA会議が行われました。私は会議に参加する前に、MRAという組織が存在することさえ知りませんでした。参加しようと思った理由は友達に誘われたからです。MRAの会議に参加した人達は日本人だけでなく、韓国人をはじめ、世界の様々の国から来た人たちもいました。MRAのプログラム「アクション・フォー・ライフ」に参加している若者達も小田原に来ました。そのため会議では、いろんな人の話を聞いたり、いろんな意見を交換したりすることができました。特に「アクション・フォー・ライフ」の人の話を聞いて、人は皆こんなに苦しんでいるんだ、ということに気づきました。そして、会議に参加する以前は、人は努力をしても、その苦しみや憎しみをポジティヴな感情に変えることなどできないと思っていましたが、そうではないことに気づきました。この2日間、MRAから学んだことは“チェンジ”です。つまり、世界あるいは他の人を変える前に自分を変えることです。自分の悪い所を時間のある時によく考えて、毎日変わる努力をします。そして、この会議で一番印象に残ったことは、MRAの日本人のメンバーが韓国人のパクさんに謝ったことでした。私はアフリカのセネガル出身で、昔、私の国では400年もの間、奴隷売買が行われ、200年にわたってフランスの植民地でしたが、独立後、一度もフランスからの謝罪を受けることはありませんでした。ですから、この会議で日本人が韓国人に謝罪するのを目の当たりにして感動しました。MRAの会議は本当にとても楽しく、勉強になりました。また来年の会議に参加したいです。最後に、この場をお借りして、私の会議参加を可能にしてくださった中嶋良樹さんにお礼を申し上げたいです。お陰で、私はMRAの会議に参加でき、目が覚めるような貴重な体験をしました。　（以上）

東京シンポジュウムレポート

21世紀を対話と和解の世紀にするために

～一人ひとりが変化をもたらすイニシエーターとなろう～

小田原国際会議に引き続き、6月16日（日）には、学習院創立百周年記念会館小講堂において、同テーマでのシンポジュウムが世界宗教者平和会議（WCRP）日本委員会、及び東京フォーラムの後援を得て開催され、130余名が参加しました。

橋本徹国際ＭＲＡ日本協会会長の基調講演に続き、コーディネーターの加藤タキさん（タキ・オフィス代表）の、「12歳の時に、母、加藤シヅエと共にアメリカでＭＲＡ大会に出席し、朝、静かな時間を持つこと、心に浮かんだことをメモすること、そして、自分の行いを良心に照らして生きることを学びました。そのＭＲＡ精神を心として生きているので、忙しくても、精神的に充実して楽しく暮らしています。ＭＲＡの4つの指標である絶対の純粋さ、正直、無私、そして愛にのっとって日々をすごそうと努めています。日本の現在の閉塞感に満ちた現状で、他の人々を責めるのではなく、自分を省みて変えていくことが大切と思います」というイントロダクションから始まりました。

続いて、各パネリストの方々からのプレゼンテーションが行われました。

先ず、木内孝氏（三菱電機顧問、フューチャー500会長）は、「10年前にサラワク熱帯雨林を訪ねたのを契機にかけがえのない自然の大切さに気付きました」と述べ、善悪の基準を自然に良いか悪いかで判断することを提案しました。他にも、日本人が憲法を理解し国にとって大切なものが何かを考えること、又、歴史、特に、1830年から現在までの170年の歴史を知ることの大切さを訴えました。同時に価値観の大切さを説き、「経済至上主義でない日本のビジョンを作りましょう」と呼び掛けました。

続いて、トルコのセリム・ュジェル・ギュレチ氏（東京ジャーミー・文化センター副代表）は、次のように述べました。「良い人間の条件も悪い人間の条件も世界中で共通しています。嘘をつく、人を騙す、弱い者を苛める、老人を捨てるのが良いと言う人はいません。今は科学の発達で情報を交換し、共通の価値観を得ることができます。古代から地域の別なく、全ての人は人間として共通の価値観を持っています。基本的にこの共通の価値観の上に文明が栄えます。世界に紛争が起こる度に宗教が犯人のように扱われますが、それは人々の知識の無さに由来しています。文明のもとは宗教です。真に文明、宗教の教えは何かと見つめるならば、宗教、文明が衝突や争いの犯人になることにはなりません。」

次ぎに、杉谷義純氏（WCRP事務総長、天台宗元宗務総長）は、次のように述べました。
「世界で起こる紛争には必ず利害関係があります。これを理由付けるために文明、宗教が利用されます。どの宗教も争いを認めるものはありませんが、信じて行動するのが人間であるので、人間はその弱さの故に宗教を利用したがります。宗教で大切なのは、如何に自己犠牲できるかということです。余ったものを人に上げるのでなく、自分の買いたいものを我慢して寄付することです。そうすれば身を割くほどの本当の喜びも得られます。時間はかかりますが、心の結びつきは壁に当たっても壊れず、強く長く続くものとなります。宗教は、絶対の真実、絶対の愛です。絶対の前では自分は無になります。自分を無にしないと教えを受け入れられるものではありません。」

続いて羽田孜氏（元首相、衆議院議員、ＭＲＡ推進議員連盟会長）は、1993年にワシントンのホワイトハウスで当時のラビン首相とアラファト議長が和平を誓って握手する仲介の労をノルウェーがとったことを紹介された後、次のように述べました。

「今、インドとパキスタン問題でもノルウェーが力を尽くしています。ノルウェーは大国ではありませんが、各国の平和のために働いています。ＭＲＡの創始者であるブックマン博士がスカンジナビア諸国は世界の調停役に適している、世界のために大きな仕事をしてはどうかと話されたと伺いました。私はインドとパキスタンのカシミール問題のためにも両国を訪ね首相と会談したり、ロシア、EUにも我々の行動を伝えて平和のために力を尽くしたいとの意欲を発信しています。日本はイスラエル/パレスチナの和平のために多くの援助をしてきました。世界各地の紛争事件に対応していくのも政治の役割だと思い力を尽くしています。」

最後のパネリストとして保岡孝顕氏（上智大学社会正義研究所、国際カトリックプレス連盟日本支部会長）は、次のように述べました。

「21世紀の今日、人々の間に人種・階級間の暴力や非平和の状況が続いていますが、日本はそのことへの反省と将来の若い世代につなげる理念を明確にし、新しい教育価値観として日本から発信することです。日本には、630の大学がありますが、教育立国の日本は、過去・現在・未来の問題に対してどのように知的貢献が出来るか、道義的責任を果たせるかを問い直すことです。そうすることにより日本の教育を国際基準に押し上げていくことができると思います。

海外の実状を見て初めて、国内の諸問題、差別の問題にも目が向けられると思います。知的トレーニングと体験をした若い学生が将来の社会への使命感をもって生きていくよう教育していくことが私どものつとめと信じます。

歴史の中で我々は他に対して不正を行ったこと、罪を犯したことの責任を認め、許し合うことが大切です。過去の悪事の許しを請うことは神との和解につながり、それは隣人と和解する第一歩です。隣人を大切にする人間を育てること、記憶の浄化と許しを請うことは教育の中で常に問われなければなりません。それぞれが自分の使命感を持って生きていくことが教育の源です。」

最後にコメンテーターの荒井佐よ子氏（東京フォーラム代表）は、次のように参加者に呼び掛けました。「パネリストの方々からのお話の共通項として受け止めたのは物質的豊かさではなく、お互いの信頼の大切さであり、自分を無にして相手と接することでした。ただ聞いて良かったで帰るのでなく、一人ひとりが自覚し、その上で如何に行動するかを考えねばなりません。先ずは自分が変わることですが、変わるのが困難と思う時には、何故変われないか自問し、変わることを妨げる壁が社会にあるのか、自分自身の傲慢さにあるのかを考えてみましょう。トフラー氏は今日の情報社会を第3の波と言いましたが、これから必要なのはＭＲＡの精神に基づく第4の波だと思います。是非、日本から起こしたいものです。」

（以上）

（このレポートは、東京フォーラムがまとめられたレポートからご厚意により抜粋させて頂いたものです。）

◇◇小田原会議以来の日韓対話プロジェクトについて ◇◇

佐々木　淳（青山学院大学４年生）

６月の小田原会議以来、会議中の謝罪をきっかけとして、若者による日韓の相互理解を深めようとする対話プロジェクトが進行しています。謝罪があったのみで終わらせてはならないという思いから、ミーティングを開き、お互いを知るための対話プロジェクトを立ち上げようとの結論に至りました。

これまでは、日本の歴史教科書や、各自が選んだ書物をもとに、日本または韓国ないし両国の抱える問題や、埋めるべきギャップについて勉強しました。これからは、実際のプログラムを運営するにあたり、そういったアカデミックな面と、またそうではない、人間としてお互いをより深く知ることができるようなプログラム（例えば生活上の共同作業やスポーツ・音楽など）をどう織りまぜて行くかが問題となってきます。

このプロジェクトを通し、相互理解を深め、各々が力を獲得し、また様々なネットワークを持ち、将来的に、そのプロセスを持って、共同して世界の問題に対し取り組むことができる関係が構築できることを目指していきます。

最後に、これまでも、そしてこれからも我々に力添え下さる方々に感謝すると共に、我々にこのようなきっかけを与えて下さった恵子ホームズさんとマザー・パクに敬意を表し、御礼申し上げたいと思います。

●マザー・パク及びリュウ夫妻と共に

事務局便り

◇本年6月の小田原国際会議に参加されるため来日された、イエンツ・ウイルヘルムセンさん、並びに、アクション・フォー・ライフの関係者の方々のために、ホームステイの受け入れ、ご寄付、又、ご家庭に招いて頂いたり、各地にご案内頂くなど多くの方々のご厚意を賜りました。ここに改めて心より御礼申し上げます。

◇来る12月7日（土）の午後には、第37回通常総会と共に、聖路加国際病院の日野原重明理事長をお迎えし、相馬雪香名誉会長との対談並びに懇親会を予定しております。改めてご案内を差し上げますが、どうぞ、予めご予定にお入れ下さいますようお願い致します。

◇IMAJニュースの発行が遅れ申し訳ありませんでしたが、お陰様で第100号の記念すべき号となりました。是非、ニュースに対する皆様のご意見、ご要望等をお寄せ下さい。